

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	「読み取り」に頼らない「とんち話」の学習：4年生『吉四六話』を題材として
Author(s)	武村, 昌於
Citation	児童の言語生態研究, 17 : 39 - 47
Issue Date	2009-07-10
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045205">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045205</a>
Right	
Relation	



# 国語の授業はこうする

4年生・思考

## 「読み取り」に頼らない

### 「とんち話」の学習

—4年生『吉四六話』を題材として—

武村 昌 於

#### 1 「おもしろかったところを發表しあいましょう」で終わらせないために

物語や民話の学習で、お話を読み取りながら、「心に残ったところを言い合いましょ」  
う」「おもしろかったところを發表しあいましょう」で終わってしまうことはありませんか。しかし、これで満足している先生はほとんどいないのではないだろうか。おそらく、子どもにとつてもっと「実」のある指導ができたのではないかと、と自問自答する先生がほとんどではないかと思えます。

「おもしろかったところ」「心に残ったところ」の感想が生きるように音読する、という同じです。読み取りや音読を否定するものではありません。けれども、読み取る内

容にもつとズバツと切り込める手立てはないものだろうか、ということですが。

「とんち話」で例を取ると、「おもしろさ」を理解させようとするために、登場人物の人間関係を明らかにし、おもしろさの構図を説明し、内容を読み取らせようとしています。

けれども子どもたちは、その理解や説明のための時間が長ければ長くなるほど退屈してしまいます。なぜでしょうか。それは、「おもしろさ」の受け取り方が教師と子どもとは異なっているからです。教師は頭の中では「教材を教える」ではなく「教材で教え」たいと思つていても、いざ現場に立つと、教材で何を教えていいのか分からなくなるのが現状だと思います。

今回取り上げる教科書（光村出版・四年生）の学習指導書では、「吉四六が頓知でもつ

て権力者・権威者をやりこめ、その場を切り抜ける愉快さを通して、吉四六のたくましい生き方や大らかな人物像の魅力に気づかせたい。また、吉四六の活躍に託された、昔の弱く、貧しい庶民たちの思いや願いについても想像させ、民話の心（主題）に迫らせたい。」と言つたようなことが書かれています。しかし、このもつともらしい教材観が教師を戸惑わせているのです。こういった教材観を「教えよう」「理解させよう」とするか、教材と子どもとの距離を感じ、結局「おもしろかったところを發表しあいましょう」で終わってしまうわけです。

## 2

### 教材を「教材化」するカギ

現行の指導要領では、教師は教えてはいけない、支援しなさいと言われました。それによって主題や構想を教えない代わりに、子どもたちに任せて傍観している教師が増えてしまいました。そうではなく、教師は教材を熟読し、子どもたちが「本質」を探り当てられる手助けをするべきです。

では、教材の「本質」とは何でしょうか。弱い者と権力者との対峙を通して吉四六のたくましさや大らかさを理解させることでしょうか。また、学習指導書で言う「民話の心」でしょうか。しかし、このことを教えたり理解させたりすると、「教材を教える」ではなく「教材で教える」と言いながら、結局「教材を教え」てしまう隘路に陥ってしまうことになるのです。

教材を「教材化」するカギは、ズバリ「子どものことばの生感（在り様）」にあります。「とんち話」で言えば、「頓知」という「思考」面が子どもたちの内でどう育っているか、頓知の仕組みの背景となる人間関係を捉える心の働き（「構え」や「感情」）が子どもの中でどう育っているのかが分かりさえすれば、「教材化」できるのです。否、それ

なくして教材化はないのです。

子どものことばの生感を明らかにしながら、または探りながら授業を進める。そこでは子どもの実態と乖離した授業ではなく、子どもの内面が育つ「実」のある授業が生まれます。私たちは、もうそろそろ「教材を教える」呪縛から解き放されて、「子どものことばの生感」から出発する授業に臨んでみようではありませんか。

## 3

### 国語学習と「とんち話」

とんち話としてよく知られる『一休さんの話』や『吉四六話』は、教材として教科書にも度々採り上げられています。ところが、子ども向けに出版されている本に収録されているとんち話をみると、子ども向けのとんち話として相応しくないと思われるものもあります。中には、知恵を使って自分の利得を図るためだけの話や相手をやりこめるだけの話、社会的弱者としての打算やずる賢さの効用を説いた話なども含まれています。

しかし、小学生に、国語学習としてとんち話を教材とするためには、そのようなマイナスの要素がなるべく含まれないものでなければならぬと考えます。したがって、とんち

話によく見られるような、「子どもに大人がやりこめられる」ことに焦点を当ててしまうのではなく、あくまでも「知恵の使い方、使われ方」に面白さを感じさせるような方向にもっていかなければなりません。

「頓知」の「頓」とは、「急に」「とっさに」「考えを整理する」ということです。したがって、「頓知」とは、「知恵を使ってとっさに筋の通った理屈を言い、その場を上手く切り抜ける」ということとなります。

そこで、国語学習の教材としてとんち話を成り立たせるためには、頓知としての「知恵の働かせ方」の要素を子どもがどう捉え、「知恵の働かせ方」がどう育っているかを明らかにしていくことが必要なのです。

## 4

### 学習指導計画

1、単元「とんち話を読む」  
教材

大分県の民話『吉四六話』  
(瀬川拓男作 平成5年版  
光村図書4年上)

2、単元の目標

・とんち話のしくみに着目し、とんち話の面白さを理解することができるようにする。

・とんち話を作り、とんちを働かせる楽しさを味わうことができるようにする。

### 3、指導計画（6時間扱い）

- ・第1次 『吉四六話』その1を読み、とんち話のしくみを考え合う。（2時間）
- ・第2次 『吉四六話』その2を読み、とんち話のしくみを考え合う。（2時間）
- ・第3次 とんち話の要素についてまとめる。（1時間）
- ・第4次 『無言の行』の話を途中まで読み、そのお話の続きを作ったり、自分で考えたとんち話を作ったりする。（1時間）

## 5 学習の展開はじめる

### 1、（第1次 1時限目）

◎学習の目標を提示する。

- ・問いかけ1「とんち話ということだと思いつくお話は何か」
- ・問いかけ2「どういう話をとんち話というのか」
- これらの問いかけから、学習の目標として「どんな知恵を働かせることがとんちなのかを考える」ことを意識付ける。

◎『吉四六話』その1を途中まで読み、吉四六さんがその時、どのようなことをしたり

言ったりしたかを話し合う。

教材文（その1）は次の通りである。

（吉四六どんは、小さいころから風変わりだったそう。）

家のもんがみんな畑仕事に行くというので、小さい吉四六が、るす番をすることになった。家のうら庭のかきは、よううれてた。いそう見事だったから、出がけに父親が言った。

「これ、吉四六、うちのかきは今年が初なりじゃ。おまえ、気をつけて見ちよれや。」

「はいっ。」

吉四六がかしい返事をしたので、家のもんは安心して出かけたそう。

さて、夕方もどつてみると、今朝方、かきの木のはたにすわりこんだ吉四六が、今もそこにじっとしている。父親はびっくりして言うた。

「なんじゃ、おまえ、一日じゅうそうしちよつたんか。」

「はい、気をつけてかきの木を見ちよれ言うたけん、こうしてよう見ちよつたんじゃ。」

父親は、ふと、かきの木を見上げた。

「や、や、やあ。うれたかきは一つもないが……。こりや、どうしたことか。」

※1（ここまでを読み、お話作り1をさせる）次の教材文は次のとおり。

すると、吉四六は、すまして答えたそう。

「よう見ちよつた。見ちよる前で、村のわかいもんが来て、次々とかきの木に登ってなあ。そうして、みんなもいできてしようたんじゃ。よう見ちよつたけん、まちがいない。」

実は吉四六どん、父親が一つも食わせてくれんので、るすの間に村の子どもたちをよび集め、たらふく柿を食うたのだと。」

◎「吉四六話」その1の途中まで（※1）読み、話し合う。

・問いかけ「吉四六どんは、じつと動かずに柿の実を見ていたと言った。それなのに、柿の実はなくなっていた。では、吉四六どんはどんな知恵を働かせて上手く父親に言ったのだろうか。」

◎次のような問いかけの後、吉四六どんが言った言葉を5分間ほどでノートに書く。

- (1)吉四六どんも村の人もやったということが分からないように父親に言うには？
- (2)村の人がやったと分かっても、吉四六どんがやったとは分からないように父親に言うには？

### 2、（第1次 2時限目）

◎昨日書いた作文をプリントし、それを子どもたちに読み聞かせながら、それぞれの子

どもが作文に書いた言葉で父親が承知するかしないか、3段階の評価で聞いてみる。また、そのように評価した理由もできる限り聞いてみる。

○承知すると思う。

△どちらとも言えない。(または、どちらとも言える。)

×承知しないと思う。

※以下には、指導の参考になると思われる子どもの作文例を示す。

### 作文例 ①

「お父さま、お父さま、たいへんです。ぼくがまばたきしている間に、かきが1つものこらずなくなっていたのです。えーん、えーん。(うそなき)」

○2人

△10人(理由 泣いたらおこられないから。

父親にあきれたと思われるということもありえるから。)

×25人(理由 あり得ないことだから。まばたきの間に全部なくなるわけがない。)

### 作文例 ②

「お父さま、お父さま、たいへんです。村の子供や大人がうちにぞろぞろ入ってきて、

『やめるー』と言ったんですけど、ぼくは大人にふみつぶされて、気をうしなっていて。えーん、えーん。(うそなき)」

○0人

△11人(「本当に泣いたら怒られない」という場合は、11人が23人になる)

×26人(理由 そんなに簡単にふみつぶされないから。気を失ったのに、吉四六どんが元気なのはおかしいから。)

### 作文例 ③

「さるが来て、すばやく取って行っちゃったんだよ。」

○0人

△7人

×30人

### 作文例 ④

「村の人達が来て、僕1人对村の人達になったから、『かきあげるからやめて』と言った。」

○0人

△34人(理由 吉四六どんは村の人に好かれて

いるからやられたりしないけど、相手が子どもだったらやられるかもしれないから。あげるものは、別に柿じゃなくてもいいのでは。)

×3人

### 作文例 ⑤

「うれすぎて、みんな地面に落ちてしまった。なので、かきをそうじした。」

○9人

△22人

×6人

### 作文例 ⑥

「カラスがゆらして、かきが落ちて、それをぼくがごみばこに入れたからなくなったんだよ。」

○0人

△4人

×33人

### 作文例 ⑦

「村の人達がうらやましがってかきの悪口を言ったから、おいしいしよこにかきをあげた。」

○26人

△5人

×6人

### 作文例 ⑧

「村の人が食べたんだ。でも、おらははらがいたくて、うううう……」

○0人

△0人  
×37人 (吉四六どんが食べようとしたことが  
分かってしまう)

作文例 ⑨

「どろぼうが入って柿を食べられてしまった。だが、父さんはかきをよよく見てると言ったので、ただ見ていた。」

○9人

△15人

×13人

作文例 ⑩

「村の人達が全部とっていききました。お父さんは『しっかり見ちよれや』としか言わなかったの、とりかえしませんでした。」

○0人

△33人

×4人

以上の作文例と子どもたちの反応から見えてくること。

・ 柿の実を持っていった者が「どろぼう」や「さる」「カラス」とする答えに対して、「父親が納得する」と評価した者は少ない。「わざとらしい」という理由からである。

・ 「熱れ過ぎてみんな地面に落ちてしまった。」というように、人為的ではない自然

現象としての原因であったら父親が納得するとしている。

・ 「どろぼうが入って柿を食べられてしまった。だが、父さんはかきをよよく見てると言ったので、ただ見ていた。」と書いた作文に対して、「ただ見ていた」とする点に関しては教材の原文に近いのに、子どもたちの評価は○△×が3分の1ずつである。

・ 作文例⑩にあるように、柿の実を持っていった者を「村人」とするよりも、もっと人為的なものではないものに原因を求めようとする傾向がある。

・ つまり、誰の(または何の) 仕業によって柿の実が無くなったかということがまず子どもたちの関心事であり、そのことと吉四六どんがとんちを働かせてその場をうまく切り抜けることと切り離せない関係にある、ということである。教師はややもすると知恵の働かせ方のみに焦点を当てて考えるが、子どものこだわりはもっと異なったところにある。こういったところに、教師の思惑と子どもの実態とがかけ離れている場合があるということに思い至らなければならない。

・ それに対して、吉四六どんがとんちを働かせ、その場をうまく切り抜けるために、「ただ見ていただけ」と父親に言い訳をす

る作文例は多く見られる。したがって、指導する際には、誰の(または何の) 仕業によって柿の実が無くなったかということと、頓知を使ってその場を切り抜けることを分けて整理してやる必要がある。

次に頓知の知恵を働かせた作文例を示す。

i 「みんなはかきをとったりたべたりしてたけど、ぼくはお父さんが、見てろって言ったから、よだれをたらして見ていた。」

ii 「村の人達が全部とっていききました。お父さんは『しっかり見ちよれや』としか言わなかったの、とりかえしませんでした。」

iii 「かきの木をずっと見てると言ったから、どろぼうが来てもカラスが来てもなにもせず、かきの木を見てました。」

iv 「かきの木をずっと見ていたら、村の人達が集まってきて、木に登り、実を食べて帰っていったよ。だけどぼくはなにもせず見ていたよ。」

v 「鳥が食べていったんだよ。見ちよれって言われたから鳥をおいはらわなかったんだよ。」

3、(第2次 1時限目)

◎ 『吉四六話』その2を途中まで(※2)読み、吉四六さんがその時、どのようなこと

をしたり言ったりしたかを話し合う。

教材文は次の通りである。

（年ごろになった吉四六どん、ぶらぶら遊んでもおられんで、川のわたしもりになったそうな。

あるとき、一人の武士が来て、吉四六にきいた。

「わたしちはなんぼか。」

「へえ、八文で。」

と、吉四六が答えると、

「六文に負けい。」

と言うてきかん。吉四六はあきらめたのか、

「よいよい。さあ、乗らんせ。」

と言うて、さおをさした。

※2（ここまでを読み、お話作りをさせる）  
次の教材文は次のとおり。

ところが、あと少しで向こう岸に着くとい  
うとき、

「ここまでで六文じゃ。あいすまんが、こ  
でおりにくださらんか。」

と、舟を止めた。びっくりした武士が、

「そりゃこまる。こんな所におりられる  
か。」

「そんなら、元の岸にもどるまでじゃ。」

と、たちまち後もどりを始めた。

「おさむらい様、行きが六文、もどりが六

文、行きともどりで十二文になりますわ  
い。」

吉四六の言葉に、武士もすっかり参って、  
「急ぎの用じゃ。望みどおり金ははらうによ  
つて、向こう岸までとどけてくれい。」  
と、やつとのもことで向こう岸にわたしてもろ  
うたそうな。」

◎「吉四六話」その2の途中まで（※2）読  
み、話し合う。

・問いかけ「渡し守の吉四六どんが、どうい  
つたとんちを使えば、渡し賃を武士に払わ  
せることができるか、その時吉四六どんが  
どのようなことをしたり言ったりしたの  
か」

◎前の問いかけの内容で、吉四六どんが言っ  
た言葉を5分間ほどでノートに書く。

#### 4、（第2次 2時限目）

◎昨日書いた作文をプリントし、それを子ど  
もたちに読み聞かせながら、それぞれの子  
どもが作文に書いた言葉で武士が承知する  
かしないか、3段階の評価で聞いてみる。  
また、そのように評価した理由もできる限  
り聞いてみる。

※以下には、指導の参考になると思われる子  
どもの作文例を示す。

#### 作文例 ①

「私はお金がなくて、毎日食べられません。  
だから、どうかお金を八文はらうてくださ  
い」となみだ声で言った。そして、「どうか  
おねがいます。」とひざまづいてねだつ  
た。そうすれば、はらえないではいられなく  
なるから。

○0人

△32人（理由 涙声で言えば聞いてくれたか  
もしれないので。）

×5人（これについては、後で本人自身から  
「これはとんちではない」という返  
事が返ってきた。）

#### 作文例 ②

「今、舟に乗りましたね。八文ください。舟  
に乗るには、八文はらうて乗ってください。  
八文はらわないと、八文はらうまで、一生舟  
を動かせません。」

○0人

△16人

×21人（理由 武士が刀を抜いたらどうする  
のか）

#### 作文例 ③

「吉四六はあきらめて、『六文』と言った。  
そして、渡り切った後、『二文出して下さ

い』と言った。でもさむらいが、『お前が六文でいいと言っただろう。』と言った。そこで、吉四六が大声で、『ここに悪い武士がいまゝす。本当は八文なのに、六文にしろとこわい声で言ったから。』とみんなに言った。」

○0人

△4人(理由 とんちじゃないが、大声で叫べば誰か来るかもしれないから。)

×33人(理由 助けを求めているだけで、とんちだとは思えないから。)

#### 作文例 ④

「この川の神は、八文出さないとおこつてしまい、たたりがおきます。私の兄はそれで命をおとしたのです。」

○2人

△12人(理由 武士がその話を信じるかどうか問題だけれど、知恵は働いていないかもしれないから。)

×23人(神が怒るのは信じにくいし、後で兄に会ってしまったたりしてはまずいから。)

#### 作文例 ⑤

「『八文はらわないと川に落としてしまうぞ。』と言って、おしたおすしぐさをした。」

○0人

△0人  
×37人(理由 武士は強いので、吉四六どんが殺されてしまうから。)

以上に上げた作文例では、このような解決のしかたでは知恵を働かせたことにはならない、という子どもたちの評価であった。ただ、次のような作文例を上げることによって、「川の途中までは六文分だ」という要素(条件)に対して着目していくことができる。

#### 作文例 ⑥

「『八文で全部わたるので、六文なのでここまでです。』と言って、半分あたりまでこいで、じぶんだけおいて、川を泳いだ。おさむらいさんは泳げるかつこうではないので、八文はらつてきしまでこいでもらった。」

○11人

△19人

×7人(理由 吉四六どんが泳げなかったらどうするのか? 川の流が速かったらどうなるのか?)

この作文例では、まだ、泳げるか泳げないか、川の流が速いかどうかにこだわっている面があるが、「川の途中までは六文分だ」とする要素に気が付いてきている。そこで、

次のような作文例を示すと、ほとんどの子どもが、「知恵を働かせたことになる」という評価になった。

#### 作文例 ⑦

「吉四六さんは、なにも言わないで、六文のところまで乗せてやった。でもその六文のところは川の中だったから、武士はくやしがつて『八文出すから、そこまで乗せてくれ。』と言った。」

#### 作文例 ⑧

「それだけしか払ってこれないなら川の半分までしか運ばません。お侍さまは、びしょびしょになりたくないでしょ。」

#### 作文例 ⑨

「川のとちゅうまでしか武士をはこばなかった。『あなたが八文はらうまで、私はここを動きません。』と言った。」

#### 作文例 ⑩

「吉四六さんは六文しかわたされないので、舟を岸と岸の間でとめて『ここが六文のコースです』と言った。武士は舟を途中で止められてはこまるから、仕方なく吉四六さんに八文わたした。」



### 作文例 ①

「『分かりました。では、六文ください。』  
『では、とちゅうまで舟で行ってあげますの  
で、そこから歩いてください。』と言っ  
た。」

### 5、(第3次)

とんち話の要素について話し合い、その後  
「とんち話とは」という題名で作文を書き、  
とんち話の要素をまとめる。

次の作文例の太字部分は、とんち話の要素  
が特徴的に表れていると思われる箇所であ  
る。

### 作文例 ①

- ・ふつうの人より先のことを考えて、自分が良くなるようにする。
- ・知恵を使う人の相手は自分より身分が高い人だと思われる。
- ・最後には、知恵を使った人の方が良い結果になり、相手は言いたくても言えないまま終わってしまう。
- ・すぐに知恵がうかんでくる。

### 作文例 ②

- ・とんち話は変わっているし、その変わり方

で笑えるストーリー。

- ・だます相手がみんな年上、もしくははしたがわれないといけない人。レベルが高い人。年下だったら、しょうじきに言えばゆるしてもらえないけど、年上だとおこられると思うから、うまくだまして自分を助けるんだと思います。

・だから、ケンカなしで、最後には仲直りみたいな感じになってるんだと思います。  
いわゆる自分を助けられて、ハッピーエンドになっていると思わないでもない。

### 作文例 ③

- ・ふつうではない考えを持ち、その場でそのことを言い、自分を助ける。
- ・相手の方が身分が高い。つまり、相手をおこらせないように言う。
- ・知恵は、すぐに思いつかなければならぬ。
- ・最後には、おたがい仲良くなる。(ゆるしあう)

### 作文例 ④

- ・とんち話とは、吉四六さんや一休さんのように、そんなしないで、ぎやくにうまいうそのような話を言って、倍ぐらいにもらえるような話。

- ・頭の中に知恵を持って、いろいろなことを

解決したりして、相手がこまったり、相手がだまされるようなことをとんちという。

- ・最後には、おかし(だまされた)気分になって、ゆるすというか、ゆるさなきやいけないじょうたいになる。

### 作文例 ⑤

- ・いかにも感心してしまう話。
- ・最終的に二人がなっとくする結末になる。相手がゆるすようなこと。
- ・うそはうそでも、ばれないうそをついてだます。

### 作文例 ⑥

- ・ふつうの話やふつうの人の考えた事のうらをつく話。
- ・その場でいきなり起こったピンチの時に、その言葉によって自分が助かるらしい。
- ・とんちを上手くするためには、知恵を早く働かせる事。

### 作文例 ⑦

- ・とんち話は、相手に気づかれずに、また、おこられないようにして相手をだます。

### 作文例 ⑧

- ・「ピンチ」っと思った時に、頭を使い、「どう言えばだませるかなあ。」「あつ、

これだ！」とひらめいて、自分を助けるのが「とんち話」だと思います。

### 作文例 ⑨

- ・人を、「うーくん。」といわせる話。
- ・人をだまして、でもなっとくさせる話。
- ・さいごには、おたがいになっとくする。

※以上の話し合いや作文から、とんち話としての要素としてこどもたちは次のように捉えていることが分かる。

- ・相手が年上、または自分が従わなければならない人。
- ・相手を怒らせないように言い、お話の最後には、お互いに仲直りしたり、許しあえたりする。
- ・お話の最後には、お互いに納得したり、相手が「なるほど」と感心してしまったり、相手をあきれさせたりする。
- ・頭にひらめいて、言葉がとっさに出てくる話。

### 6、(第4次)

『無言の行』(『ちえのあるはなし』羽仁説子作 あすなろ書房)の話を通りまで読み、そのお話の続きを作ったり、自分で考えたとんち話を作ったりする。

『無言の行』の原文は以下の通りである。  
(山寺に、おしようさんとこぼうずが住んでいました。

あるばん、おしようさんは、こぼうずたちを集めて、

「これ、これ、こぞう。今夜はこれから、無言の行というものを始めるぞ。よいか。どんなことがあっても、けつして口をきいてはならん。心の中で、ありがたいお念仏をと念えなければ、どんなことが起こっても、物を言うわけはないのじゃ。わかったか。」

そこで、おしようさんとこぼうずたちは、広い本堂にろうそくをともし、その下にならんで、じつとすわりました。)

(この後の文章を考えてお話作りをする。)

### 作文例「無言の行」

「そうすると、こぼうずたちは走ったり遊んだりしました。でも、だれ一人しゃべっている人はいません。おしようさんが、

「どうしたんだ。どうかしたのか。」

とたずねても、こぼうずたちはだれ一人しゃべりません。

とうとう、たまらなくなったおしようさんが、

「無言の行は、やめた。」

と言うと、みんながまってましたとばかりにしゃべり始めました。おしようさんがわけを聞くと、こぼうずは、

「だって、おしようさんは、しゃべるなど言っただけ、さわぐなどは一言もいっていません。私は口を一度もきいていないので、わるいことはしていません。」

おしようさんは、次の無言の行からは、しゃべるなどさわぐなの二つにしました。)

(東京・元玉川学園小学部教諭)

